

北政巳さんとの長い交遊

宮本 又郎*

北さんは姫路生まれで、大学は学部と大学院修士課程が和歌山大学、博士課程が大阪大学と、根っからの関西人である。和歌山大学経済学部を卒業して大学院に進学されたのが、私とまったくの同年の1967（昭和42）年（私は神戸大学）。当時、社会経済史学会近畿部会や経営史学会関西部会はさながら、関西の諸大学の経済史・経営史関係合同大学院の風情があった。大学院生は毎月の例会に出席するように命じられたし、博士課程に進学すると両部会が学界デビューの場となった。月例会には、堀江保蔵、矢口孝次郎、宮本又次、角山榮、安藤精一、作道洋太郎、原田敏丸、三島康雄、山瀬善一、新保博、荒井政治、安岡重明といった諸先生が毎回のように出席され、どこの大学院生に対しても分け隔てなく、厳しくまた温かく指導して下さった。ここには若手研究者を関西全体で育てていこうという雰囲気があった。

こんな環境であったから、北さんと私は専門分野は異なっていたが、自然と知り合いになったが、1969年から北さんが大阪大学大学院経済学研究科博士課程に入学されたのちにはいっそう親しくなった。私は神戸大学の博士課程に属していたが、住居が阪大に近く、また父（宮本又次）が阪大教授であったことから、「もぐり」で阪大の経済史関係ゼミに参加していたからである。ところが、その頃は阪大も神戸大もご多分にもれず、学園紛争の真っ只中にあり、教室が閉鎖されたりして、授業は休講となることが多かった。勢い、私たちもソフトボールやその頃大流行であったボーリングなどに興じることが多くなった。

その頃、神戸大学には研究助成係というところに、10名ばかり女性の秘書さんたちがいた。20代前半の良家のお嬢さんらしい魅力的な女性たちであったから、助手や大学院生たちは、教授の目を盗んで（?）、彼女たちと食事会やパーティをしたり、ボーリングに行ったり、「合ハイ」（合同ハイキングのこと。いまなら「合コン」）などをして大いに青春を謳歌していた。そんな集まりに、いつの間にか、北さんも常連メンバーとなっていて、秘書室で女性たちと仲良くコーヒーを飲んでいる姿など見かけたものだった。神戸大学院生のなかには、「なんで阪大院生がいるんや」なんて言う者もいたが、そこは社会的で愛嬌のある北さんのこと、まったく違和感なく、仲間に溶け込んでおられた。このグループのなかには、後に結婚したカップルもいたし、密かにデートしていたものもいたようだが、北さんにも誰かお目当ての女性がおられたのだろうか、その方にアプローチなどされていたのであろうか？いつか聞いてみたい気がする。

* 大阪大学名誉教授

その後、北さんが創価大学に赴任されて東京に行かれてからは交遊の機会が減ったが、2人が経営史学会の富士コンファレンス運営委員に命じられてから再び顔を合わせるが多くなった。富士コンファレンスとは、谷口工業奨励財団から資金的援助を受けて、経営史学会が始めた経営史国際会議（富士山麓で開催したことから「富士コンファレンス」と命名）のことで、1974～78年の第1期に続いて、1979年から第2期が始まった。9人の運営委員は30代半ばから40代前半の人たちが中心だったが、国際学会に習熟する若手研究者を育てようとの意図から、会議の準備、運営にあたるだけでなく、報告者、コメンテーター、司会者として毎回出席することが義務づけられた。会議は毎年1月の5～8日に開かれたので、国際経験の乏しい私にとっては、この5年間はお屠蘇気分ひたる余裕もない憂鬱な正月であった。

これにひきかえ、北さんはスコットランド仕込みの語学力を駆使して、会議中のアカデミックな議論ではもちろん、食事時や懇親会、さらにコンファレンス前後の外国人研究者の観光案内、接待などで八面六臂の大活躍をされた。私にとってこの運営委員は得がたい経験となったが、それは北さんに多々助けていただいたお蔭と今でも大変感謝している。

その後の北さんの活躍も瞠目すべきものがある。40歳前後で『国際日本を拓いた人々—日本とスコットランドの絆—』と『近代スコットランド経済史研究』の2冊を相次いで刊行されたのには驚き、また刺激を受けたが、その後も人並み以上に多くの書物を出版されている。研究者として敬服するほかはない。これに加えて、創価大学の国際交流分野での任務や、長年、プロ選手を輩出するほどの強豪野球部の部長をされたことなど、通常の大学教授の何倍もの仕事をされてきたのである。このようなエネルギッシュな活動、私など及びもつかないものである。

若き日に共に学び、遊んだこの友の素晴らしい活躍に喝采を贈りたい。